



YUICHI HANADA

SOMETHING NEW

2019 VOL.1

大勢の大人がいる部屋の中で、物心ついた頃の僕に、紙と色鉛筆を渡すと、泣きも騒ぎもせず、そこにじっと黙って座り、絵を描き続けていたと言われたことがある。大人の顔色を気遣い、自分の置かれた立場を客観視し続けた幼少期だった。自我を出すことは罪だと教えられ、そのまま大人になっていくのだらうと一種の諦めを感じそうになった頃、僕はただ純粋に「諦めたくない」と思った。「僕は僕だ!」という大きな叫びと共に、「僕は何者なのか」を全ての人間に証明しなければならないと、勝手な使命を自分に与えた。

「欲望を押し殺すことができないのならば廃れた人間だ」という思いと「欲望を表に出す勇気もないならば廃人同然だ」というもう一つの思い。そのジレンマを感じる時、僕の体の中にはどうしようもない怒りが渦巻く。そして、その怒りは常に僕をむしばみ、辛く、悲しく、逃げ出したいと思う。なぜなら、その「怒り」は、24年間の自分の人生への自問自答を、「批判」とも取れるほどすることによって生まれる怒りであり、それは光なのかと問われれば、僕はまだ闇の中にいる。

しかし、逃げ出すわけにはいかない。逃げ出した先に待つものは、「死」でしかなく、死にたくないのならば突き進むしかない。だから僕は制作し続ける。

僕が画家として本格的に活動し始めた頃、僕の作品を説明するにあたって一つの言葉をもたらった。“Something New(新しい何か)”。その言葉を改めて自分自身に当てはめた時、実に正しいと感じた。なぜなら、固定概念という枠を壊し、新しい自分に出会う事に快感を感じて生きる僕の人生は、誰も見たことのない何かを生み出し、必ず新しい価値を創り出す。

革命を起こすことにしか興味が無い僕は、変化する時代の核心を作品で突き刺すことで、価値を感じる。僕の人生から生み出される作品は、葛藤と対峙しながら生きる人々の、心情を写し出し、希望となる鏡になるだろう。

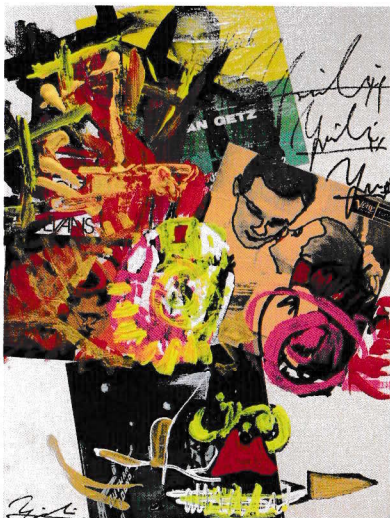


CAMERA BROWN

2019

acrylic on canvas

1620 × 1620 mm



untitled

2019
acrylic on canvas
333 × 242 mm



TOILET

2019
acrylic on canvas
333 × 242 mm



FAKE or REAL HUSBAND

2019

acrylic on canvas

1620 × 1300 mm



FAKE or REAL WIFE

2019

acrylic on canvas

1620 × 1300 mm



I don't know what I want to do

2019

acrylic on canvas

910 × 910 mm



the top of mountain

2019

acrylic on canvas

910 × 910 mm



BOSTON or BOSTON

2019

acrylic on canvas

910 × 910 mm



My King

2019
acrylic on canvas
333 × 242 mm



MIX

2019
acrylic on canvas
333 × 242 mm

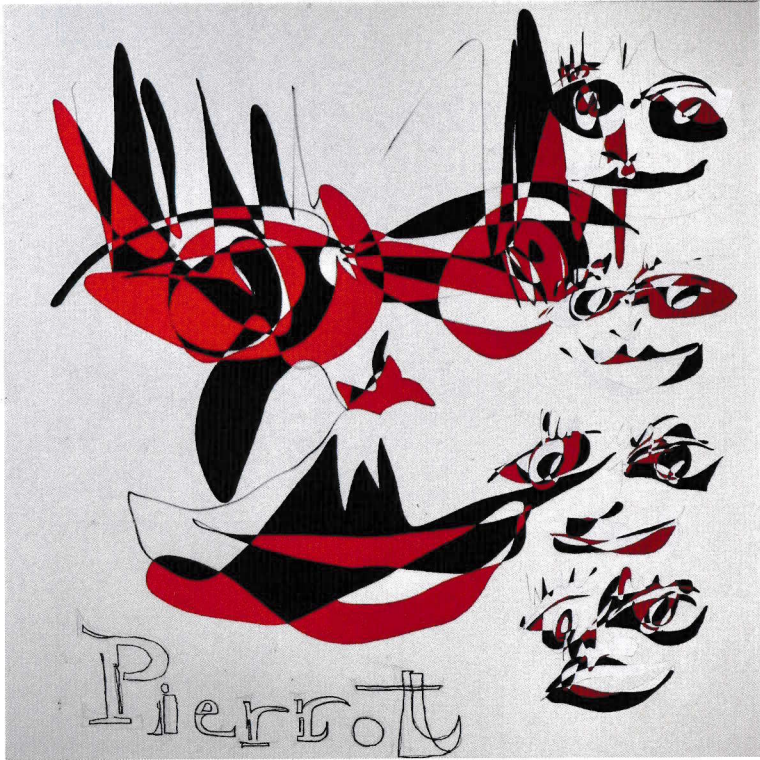


talk

2019

acrylic on canvas

1303 × 1621 mm



Pierrot

2019
acrylic on canvas
910 × 910 mm



MEMO

2019

acrylic on canvas

910 × 910 mm

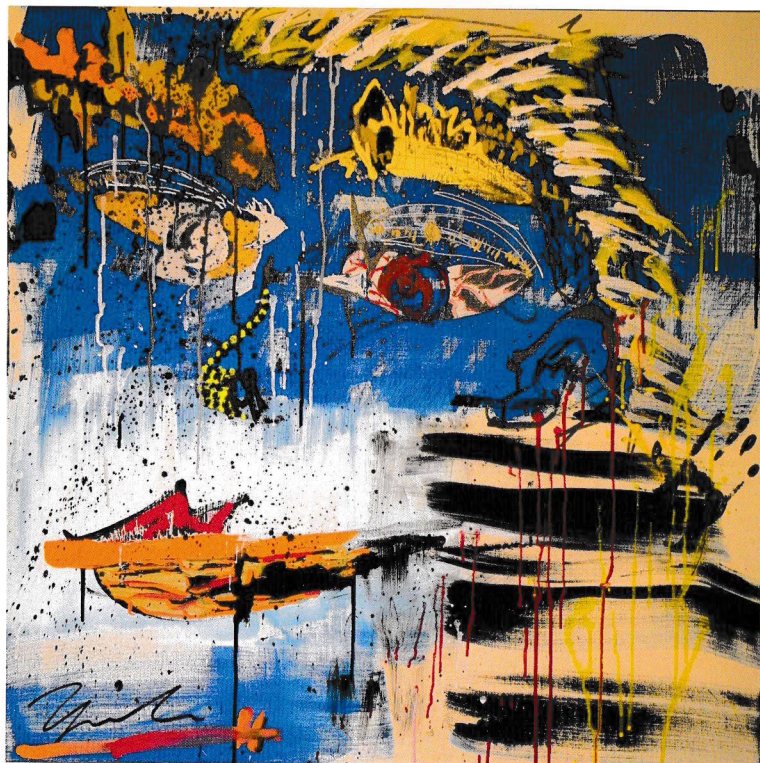


FACE

2019
acrylic on canvas
910 × 910 mm



papa
2019
acrylic on canvas
910 × 910 mm



My face

2019

acrylic on canvas

910 × 910 mm



STOOOP

2019

acrylic on canvas

910 × 910mm



unstoppable

2019

acrylic on canvas

1167 × 1167 mm

花田優一

1995年9月27日、東京生まれ

15歳で単身アメリカへ留学。その後イタリア・フィレンツェに渡り、靴職人に弟子入りし、2015年10月に帰国。同年より都内に工房を構え、靴職人としての活動をスタートさせ、2018年6月にはイタリア・フィレンツェで行われた世界的なファッションイベントである「Pitti Immagine Uomo」に出展し、YUICHI HANADAブランドを紹介。2018年以降は靴の製作と並行し、幼少期より取り組んでいた絵画の制作にも本格的に取り組んでいる。

2019年3月 ART FAIR 東京 2019 (東京国際フォーラム)

2019年7月 花田優一展-Something New- (Artglorieux GALLERY OF TOKYO)

2019年9月 ART FAIR ASIA FUKUOKA 2019 (福岡三越)



Good bye

2019
acrylic on canvas
1167 × 1167 mm

大勢の大人がいる部屋の中で、物心ついた頃の僕に、紙と色鉛筆を渡すと、泣きも騒ぎもせず、そこにじっと黙って座り、絵を描き続けていたと言われたことがある。大人の顔色を気遣い、自分の置かれた立場を客観視し続けた幼少期だった。自我を出すことは罪だと教えられ、そのまま大人になっていくのだらうと一種の諦めを感じそうになった頃、僕はただ純粋に「諦めたくない」と思った。「僕は僕だ!」という大きな叫びと共に、「僕は何者なのか」を全ての人間に証明しなければならないと、勝手な使命を自分に与えた。

「欲望を押し殺すことができないのならば廃れた人間だ」という思いと「欲望を表に出す勇気もないならば廃人同然だ」というもう一つの思い。そのジレンマを感じる時、僕の体の中にはどうしようもない怒りが渦巻く。そして、その怒りは常に僕をむしばみ、辛く、悲しく、逃げ出したいと思う。なぜなら、その「怒り」は、24年間の自分の人生への自問自答を、「批判」とも取れるほどすることによって生まれる怒りであり、それは光なのかと問われれば、僕はまだ闇の中にいる。

しかし、逃げ出すわけにはいかない。逃げ出した先に待つものは、「死」でしかなく、死にたくないのならば突き進むしかない。だから僕は制作し続ける。

僕が画家として本格的に活動し始めた頃、僕の作品を説明するにあたって一つの言葉をもたらった。"Something New(新しい何か)"。その言葉を改めて自分自身に当てはめた時、実に正しいと感じた。なぜなら、固定概念という枠を壊し、新しい自分に出会う事に快感を感じて生きる僕の人生は、誰も見たことのない何かを生み出し、必ず新しい価値を創り出す。

革命を起こすことにしか興味が無い僕は、変化する時代の核心を作品で突き刺すことで、価値を感じる。僕の人生から生み出される作品は、葛藤と対峙しながら生きる人々の、心情を写し出し、希望となる鏡になるだろう。

GALLERY CELLAR